

マレーシアの政治・経済とエスニシティ

——第10回JAMS総会 第2日目報告——

岸脇 誠*

マハティール首相は、1999年2月から2000年6月まで『毎日新聞』に「どくどくマハティールの世界診断」というコラムを執筆していた。そのコラムは『アジアから日本への伝言』というタイトルで一冊の本にまとめられ、毎日新聞社から刊行されている。マハティールはその本の中で、彼のコラムの日本語訳を担当した毎日新聞の加藤暁子記者からインタビューを受けている。加藤記者から「現在の頭痛の種は何か？」と尋ねられて、マハティールは次のように答えている。

マレー人と華人、インド人の発展の間に均衡を保つことだ。華人は都会に住み、富に慣れ、繁栄の上に築いた文化がある。しかし、マレー人は元々貧しい田舎の出身で、突然都会にやってきて、ライフ・スタイルが変わった。少々のカネを持つようになり、急激な変化に対して、生産的なやり方ができない。このままでは均衡が崩れてしまう危険を感じる¹。

このマハティールの言葉からは、マレーシアにおいてエスニック・グループ間のバランスを保つことがいかに重要であるかが窺える。また、ブミプトラ政策で優遇の対象となっているマレー人のライフ・スタイ

ルに変化が生じつつあり、そのことがエスニック・バランスに悪影響を及ぼすのではないかというマハティールの危機感も読みとることができる。もちろん、その危機感の背景には、通貨危機以降のアンワール問題、そして1999年の総選挙でPASが議席を大幅に増加させた事実が存在している。

第2報告セッションの第一報告、三木敏夫氏(札幌学院大学)の「ブミプトラ政策再考」は、先に述べたマハティールの危機感の原因となっている現代マレーシアの変化に焦点を当てたものであった。三木氏は2001年から2010年を対象としたThird Outline Perspective Plan (OPP3)に見られた資本所有比率の取り決めに着目している。OPP3ではOPP2(1991年から2000年)で棚上げされていたブミプトラの資本所有比率30%という目標値が復活し、2010年までにそれを達成することが謳われているのである。三木氏はこれをブミプトラ政策の強化であると捉え、それがアンワール問題と1999年の総選挙でのPASの躍進によるマレー人社会の分裂を修復することを狙ったものであると分析した。マハティール政権は、変貌しつつあるマレーシア社会の中で、再度、ブミプトラの求心力を高める唯一の政策であるブミプトラ政策に活路を求めたというのが三木氏の見方である。

報告の後の質疑応答では様々な意見や質問が

¹ マハティール・モハマド著、加藤暁子訳『アジアから日本への伝言』毎日新聞社、2000年、183-184ページ。

* 大阪市立大学大学院経済学研究科・博士課程

出され、活発な議論が行われた。その中で印象に残ったのは聞き取り調査に潜む問題点についてである。三木氏は、かつてマレーシア滞在中に知人から聞いた話をもとに、マレー人による華人観、華人によるマレー人観などを報告の中で紹介した。フロアからは、そうした聞き取りでは答える側が尋ねてくる相手、及びその人の立場に応じてその返答を変化させる可能性があるのではないかという意見が出された。また、マレー人にインタビューするにしても、そのマレー人がどの社会階層に属しているかによって答えが違ってくる可能性があり、一部のマレー人の意見だけを採り入れ、マレー人社会を一枚岩のように語るには問題があるという意見も出された。報告者の三木氏は先に述べたようにマレー人社会の分裂を視野に入れていることから決してマレー人社会を一枚岩に捉えているわけではないと筆者は考えるが、報告者の主張を補足する客観的なデータの裏付けがあればもっとわかりやすかったと思う。

続く第二報告は、山本博之氏(東京大学)の「マレーシアにおける民族概念: サバ州の事例より」である。この報告では、旧イギリス領北ボルネオ(サバ)が脱植民地化していく過程において民族概念がどのように形成されたかが検討された。マレーシア結成の過程で、サバの中国系住民は華人という枠組みでの政治参加を受け入れた。これは彼らが華人と原住民との区別を受け入れたことを意味していたが、同時に華人がサバの地元政権に参加することを保障するものでもあった。つまり華人とはサバの公民になるための枠組みであって、華人アイデンティティとサバ公民アイデンティティは弱めあうのではなく両立する。サバでは独立当初、カダザン人、ムスリム原住

民、華人という3つの政党が結成されたため、この3つが「民族」扱いされた。ただしこの3つの区画の境界は明確ではなく、マラヤの3民族に相当する枠組みとしてはサバ州全体を考えるべきで、マレーシア全体ではマレー人、華人、インド人、サバ人、サラワク人という5つの区画が首相のもとでそれぞれ相互扶助の枠組みを構成している、と理解するのが適切である。以上が報告の概要である。

山本氏の報告に対してもフロアから多くの質問や意見が出された。ここではその一部を紹介したい。まず、質問としては「サバ人アイデンティティはどのように規定できるのか?」、「山本氏は政党結成をもって民族アイデンティティを議論しているが、それでよいのか?他にも文化団体などを考慮すべきでは」というものがあった。これに対して、山本氏からは順に「サバ人アイデンティティはサバで選挙に参加する権利と規定できる」、「さしあたり政党の結成で考えて問題がない」という回答があった。次にコメントとして、観察者のカテゴライズと当事者のカテゴライズが必ずしも一致しないのではないかという意見があった。また、民族と州民意識というのも必ずしも一致しないのではという意見も出された。

* * *

どちらの報告でもブミプトラ政策そのものについてはあまり取り上げられなかったので、最後にブミプトラ政策にまつわる論点を挙げておきたい。

第一は、ブミプトラ政策が多民族社会の安定化装置として機能してきた点である。この点に関してマハティールは次のように述べている。

華人やインド人の中には、ブミプトラ優遇政策を

不公平だと感じる人がいるかもしれない。しかしながら、新経済政策なしには、マレーシアは1990年代の社会的安定と経済的繁栄を決して実現できなかった。ある意味では、1997年に始まった経済危機は、この政策が成功したことの証明にもなった。経済的な困難に陥っているときに、マレーシアが程良く公平な状態を保ち、安定したエスニック関係が維持できなかったならば、社会情勢は悪化して、我々はインドネシアと同じような運命を辿っていたことだろう²。

1997年以降の経済危機の際に、マレーシアの隣国インドネシアでは各地で暴動が頻発した。IMFがインドネシアに提示した経済改革プログラムに基づいて補助金が削減されると、物価が高騰し、それが暴動のきっかけとなった。国民の不満の矛先はスハルト政権そのものにも向けられたが、大衆レベルでは商店経営者の多い華人が攻撃の対象となり、放火や強奪が行われた。こうした事態を受けて、マハティールは「IMFは経済改革の社会的コストに注意を払っていない。経済と社会とは関係がないとみているようだ³」と語り、IMFを批判した。一方、マレーシアではブミプトラ政策によって多民族社会の安定と経済的繁栄の両方を手にしたとマハティールは自信をのぞかせたのである。

しかしながら、ブミプトラ政策が多民族社会の安定化装置として機能するためには前提条件が必要で

ある。それはブミプトラを優遇することが他のエスニック・グループの不満につながらないように、経済全体のパイを絶えず拡大させることである。ブミプトラ政策の出発点である第2次マレーシア計画には「誰も自分の権利、基本的人権、収入、仕事、機会の損失を被ったり、剥奪感を抱くことがないように、急速に拡大する経済の中で、国民統合を図り、マレーシアの社会を発展させる必要がある⁴」という文言が盛り込まれている。

1981年に発足したマハティール政権は、これまで85年の一次産品価格下落による不況、97年以降の通貨・金融危機という二度の大きな不況を経験したが、それらを何とか乗り越え、多民族社会の安定を維持してきた。今後、グローバル化が進展する世界経済の中で、国内経済の安定成長を維持していくことは可能なのだろうか。それは単に経済だけの問題ではなく、多民族社会の安定という観点からも重要な意味を持っている。

第二は、ブミプトラ政策が縁故主義の温床になりやすいという点である。その典型的な例は、マハティール首相の長男ミルザン(Mirzan)の経営する企業が1998年3月に株価急落の影響で多額の損失を出した際、首相の監督下にある国策会社がミルザンの企業を買収したことである。これは事実上、公的資金による民間企業救済であり、それまでの政府の方針に反するものであった。そして、その救済対象が首相の長男であったために、縁故主義であるとの批判が高まったのである。マハティールは長男の企

² Mahathir bin Mohamad, *A new Deal for Asia, Malaysia*, Pelanduk Publications, 1999 (福島範昌訳『日本再生・アジア新生』たちばな出版, 1999年), p. 36.

³ 『日本経済新聞』1998年5月17日。

⁴ Government of Malaysia, *Second Malaysia Plan 1971-1975*, Kuala Lumpur, National Printing

業救済に関して「ブミプトラと他のエスニック・グループとの間の経済的不均衡を是正する過程で」⁵行われたことだと反論したが、ブミプトラ政策が他のエスニック・グループに比べて経済的劣位に置かれているブミプトラ民衆を救済するという当初の目的から離れ、政府関係者に近いマレー人企業家を縁故によって優遇するようになってきたことは、ブミプトラ政策が内包する負の側面である言えよう。

第三は、二点目とも関連しているが、ブミプトラ政策の適用をめぐるマレー人社会内部で対立が見られるようになった点である。1998年11月にマレーシアで開かれたAPEC首脳会議に出席したアメリカのゴア副大統領(当時)は、アンワール派による反政府運動を指して、マレーシアでの民主化運動の拡大を支持すると発言した。しかし、アンワール支持者による反政府運動はゴアが述べたような民主化運動という側面を持ちながらも、同時にマレー人大衆の利益追求行動という側面を持っていることに注意しなければならない⁶。アンワールは副首相兼蔵相を解任された後「首相は自分に近い大企業の利害にばかり関心を寄せている」とマハティールを批判した上で、「私も大企業は重要だと思っているが、経済全体を犠牲にし、大衆の声を無視してまで大企業を支援すべきだとは思わない」と述べている⁷。つまり、アンワールは政府関係者に近い大企業だけを優遇する縁故主義を批判すると同時に、十分な政府支援を受け

ることができていないマレー人大衆にも利益を回すべきだと主張しているのである。三木氏は報告の中でマレー人社会の中で経済(所得)格差が生じていると指摘されていたが、多様化するマレー人社会の中でブミプトラ政策の持つ意味合いがどのように変化しつつあるのか注目される。

第四は、三木氏も報告の中で指摘されていたことだが、マハティール政権が1999年の総選挙で多くのマレー人票を失ったのとは対照的に、華人の大多数から支持を得たことによって、政権内部では華人の発言力が増している点である。例えば、マレーシア国内で最大の華人企業家団体である中華商工連合会のデビッド・チュア副会頭はブミプトラ政策について言及し、「現行の政策は誰のためにもならない。我々は一層自由化され、より多くの競争がある、実力本位の社会を求めろ」⁸と述べ、自由主義政策に基づく機会の平等を主張した。さらにチュアは自らが副議長を務める国家経済協議会で(1)マレー人に対する株式割り当て規制の緩和、(2)公務員採用や大学入学でのマレー人枠の削減などの再検討を提案すると語った。これらはブミプトラ政策の見直しを意味する。

マレー人の各種団体はこの発言に対して抗議集会を開くなど反発を強めた。チュアは「マレー人の特権は憲法に規定されており、その特権廃止の問題を提起したことは一度もない。……議論が起きたのは、ただ、一部のメディアが私の発言を誤報した

Department, 1971.,p.v.

⁵ *Asiaweek*, March 27, 1998, p.34.

⁶ 中村正志「マレーシア／通貨危機後の政治的争点とマハティール政権の課題」『アジア研ワールド・トレンド』43号、1999年3月、39ページを参照。

⁷ *Newsweek*, September 14, 1998.

⁸ Bruce Gilley, "Affirmative Reaction", *Far Eastern Economic Review*, August 10, 2000, p.26.

か、センセーショナルに伝えたためである」⁹と弁解したが、マレー人優遇に関わる問題はマレーシアにおいて文字通り敏感問題であることを改めて露呈することになった。

マハティールはこの件に関して「マレー人は弱い存在であることを知っており、マレー人の保護においては、政府は一步たりとも後退しない」¹⁰と述べ、ブミプトラ政策の存続を主張したが、政権維持のためには華人からの支持も欠かせず、マハティールは苦しい立場に立たされている。

以上、思いつくままにブミプトラ政策に関連する事柄を述べてきただけで、うまく論点が整理されていないことを御容赦いただきたい。ただ、ブミプトラ政

人社会にも大きな影響力を持っているため、その政策はマレー人社会の各階層にだけでなく、非マレーラス・マイナス両面を様々な角度から検証する必要があることは間違いない。今回の報告が契機となって今後ブミプトラ政策に関する議論が一層深まっていくことを願ってやまない。

また、山本氏のような東マレーシアの研究者と半島部の研究者が一堂に会し、活発な議論を繰り広げる様子は JAMS の醍醐味とも言うべきものであるが、たいへん興味深いものであった。このような素晴らしい研究会を設定してくださった立命館アジア太平洋大学の石井由香さんをはじめ、スタッフの方々に感謝の意を表し、拙稿を締めくりたい。

⁹ 東南アジア調査会『東南アジア月報』2000年8月号、63ページ。

¹⁰ 同上書、62ページ。